

会報

NPO法人・日本抜刀道連盟

事務局

〒222-0001
川崎市幸区中幸町一十七
電話 〇四四一五五八六六〇
FAX 〇四四一三三七五四四

制定刀法伝達講習会

毎年恒例の日本抜刀道連盟制定刀法伝達講習会は、六月二日（土）神奈川県立武道館で予定どおり終了した。

今年は例年とはちがひ、各支部長と六段以上の指導者に限られたため、参加者は二十九支部（本部を含む）、四十七名となった。（参加者リストは別冊）

講習会は国旗礼拝、役員紹介で始まり、大江正男会長が「毎年伝達講習会も開かれ、教本もあり、昨年末にはDVDも発売された。まだまだいろいろな意見もあると思うがしっかりと教本を見て、読んで、鍛錬してほしい」と挨拶した。

指導要綱

続いて中島正夫教務部長から講習会についての意義など細かい説明が



冒頭で挨拶する 大江正男会長



指導要綱の注意を強調 中島正夫 教務部長

あり、特に指導要綱として、「教本は現代剣道、居合、古武道の剣の理合と所作の枠を踏まえて完成させている。稽古中に疑問が生じた時には常に教本を見直して練度の向上に努めてほしい。」
抜刀道の生命線は稽古中の絶対安全確保と事故の皆無が重要である。この道に終わりは無い。仮標が斬れて上達したと錯覚した慢心と我執を戒めなくてはならない。

特に形の演武に於いては、形の流れを演じるのではなく、真剣刀法として『あの形なら斬れる』と認められる修練が肝要である」と注意があった。



組太刀仕様の説明をする中北参与

木刀による

組太刀仕様の公開演武

午前中は木刀による組太刀仕様（以下組太刀仕様とする）が初めて公開された。この組太刀仕様は中北祐嗣参与（東京英信会・八段）と金子翼次席副会長（志操館・八段）が中心となって研究されているもので、現在は東京の英信会や千葉の志操館、八千代支部で練習している。

連盟にはすでに真剣による組太刀はあるが（昨年の大会で模範演武した）これは打太刀、仕太刀の中間に仮標を置いて双方が斬るもので、抜刀道初心者には危険で難しい。組太刀仕様では双方が木刀を使用するの

で比較的危険が少なく、また制定刀法でも「なせこうゆう動きをするか」との理合の理解にも役立つ。

今日の演武はまず考案者の中北参与からその目的などについて説明があり、続いて仕太刀を金子次席副会長・八段が、打太刀を藤原義彦・五段（八千代支部長）が演武した。

組太刀仕様は、木刀どうしを合わせるが、単なる仮標を想定した「形」では理解しにくい理合を学ぶことが出来る。しかし振り下ろした木刀の寸止めをしなくてはならず、真剣の組太刀ほどではないにしても十分な注意が必要である。
この組太刀仕様は初めての公開演武だったが、仕太刀の所作は、連盟

伝達講習会

組太刀仕様の演武の後すぐ伝達講習会になったが、講師の先生方で意見が分かれたところもあった。特に四本目、五本目の戻り方で、教本の「十八」には「両足間の中央線の後方に向かって・・・」と明記されているが、両足間の中央線との角度についての記述はなく、正中線右斜めになるのか、正中線上なのかが争点となった。この問題は毎年議論されていることである。

審査員講習

午後からは審査員講習がおこなわれた。伝達講習会に参加した各支部長や六段以上の先生方は旗の上げ方や角度について細かい指導を受けた。

制定刀法の所作と同じもので、それに対応する打太刀の所作が工夫されている。

しかしあくまでも武道であるので、舞踊のようにゆっくりとした所作ではならず、制定刀法が想定している互角の武十同士となれば、そこには気迫と迅速さも要求されるだろう。

今回の演武を披露した金子八段、藤原五段も何回も稽古を重ねて呼吸を合わせている。

演武が終わって大きな拍手があったが、この「組太刀仕様」は今後制定刀法委員会と教務部で扱いが協議されることになり、当面は希望する支部での自主稽古となる。

しかし最も大切なことは、勝敗の基準となる判断の内容で、各試合場の審判員の判断に差があつてはならない。各審判員の先生方は日頃自分の道場（支部）で指導している基準で判断するので、その基準が勝敗を決することになる。

たとえば、講習会で問題になった所作後の戻り方一つをとっても、両足を結ぶ線に対して「九十度に戻る」とする先生と「正中線に戻る」とする先生では審判が変わってしまう。ここでも講師の先生方の議論が再熱された、この点について参加した支部長の中には、

「私たちはこれから道場（支部）で指導しなくてはならない、ここで講師が議論するのはなく、はっきりと決めてほしい」との意見がでた。（裏面に続く）

講師の先生方の議論も続いたが、会長が、「いろいろな意見があるとしても今は全て『教本どおり』にしなくて

掛声または気合の発声

掛声には掛声が付き物と思われているようにある。日本抜刀道連でも制定刀法では「気合を発声する場合は、エイ・ヤア・トウトとするが発声しなくてもよい」とし、組太刀では「気合は、打太刀がヤア、仕太刀がトウトと発声する」と定めている。

制定刀法の演武ではあまり発声は行われていないようであるが、これは「発声する場合は」と仮定的条件で示されている以上当然とも言える。そして制定刀法の稽古法である「組太刀仕様」は当然これに従うべきであるが、ここではなお一歩後退して「発声しないのを原則」とした。

二本目・左袈裟



五本目・右面左袈裟



六本目・左袈裟胸



八本目・抜き打ち突き



九本目・右面左袈裟胸



はならない」と議論に決着をつけた。この問題は全国大会までに結論を出すこととなった。

参与 中北祐嗣

どの時点で声を出すかは必ずしも一様ではない。古くは宮本武蔵の五輪書・火之巻の「三つの声といふ事」に見出せる。ここでは「初中後の声」として、戦いの場を三つに分けて声の掛け方の違いを示している。さらに「一分の兵法（一対一の勝負＝筆者訳）」では「先後の声」として「声の跡より太刀を打出すもの也。又敵を打ちてあとに声をかくる事」とし

「太刀と一度に、大きに声をかくる事なし（太刀で打つと同時に大きく声をかけることはない＝同）」としている。近くでは平成三年版の抜刀道教本を作られた加藤臣二先生は「気合を入れる（発声する＝筆者注）場合は、斬り終わつたその直後に入れることが賢明

である」とされている。いずれも「掛声とともに呼気し、打ち下ろす」現代剣法とは違うものである。弓技でも、通例の前ではあまり見られないが掛声をかける場合がある。ここでも矢を放つと同時に声を出す切音（きりね）といわれるものと、矢を離してあとに発する掛声との両方があるが、切音はあまり使われない。

- 会長・大江正男
- 副会長・中世古勝司
- 次席副会長・金子 翼
- 教務部長・中島正夫
- 教務次長・太田丈夫
- 同・山中洋二
- 教務部員・樋口 功
- 準備委員
- 事務局長・菅野 茂
- 次長・堀内城夫
- 局員・吉村宙也
- 会計部長・岡本光正
- 監査・佐藤敬子
- 司会・小林大二

気合を発声するのが、技を打ち出すのと同時か直後か、あるいは前か、そのどれが良いのかを論ずるのは、いまの筆者の役目ではない。加藤先生でさえ「賢明である」と控えめに述べていられるものを、簡単に決められる訳がない。要は精神充実の発露である掛声一つでも縦横自在な変化がありうるということである。

講習会参加支部・参加者
役員・講師
参与・中北祐嗣
参与・進行・森本武久

- 組太刀仕様演武者
- 仕太刀・金子翼八段
- 打太刀・藤原義彦五段
- 参加者（受付順・役員、委員を除く）
- にかほ剣の会＝熊木昭大
- 仙台支部＝井村幹明
- 山形支部＝遠藤仁・佐藤淳一
- 笠間洗心館＝太田丈夫
- 剣誠会＝藤田久男
- 秩父興心会＝野口常男・中島始
- 保泉正夫

- さいたま尚武館＝富田憲介
- 練武会＝小根山勇
- 忠勇会＝松浦健城
- 城西支部＝奈良武
- 川崎支部＝大塚光男
- 斉藤塾＝佐藤友彰
- 鎌倉支部＝糸澤良全
- 相模原飛燕会＝野中源克斉
- 新潟支部＝小杉耐三・斎藤朝男
- 静岡支部＝飯田巨
- 大阪支部＝廣川憲司
- 島根抜刀道＝藤原尚樹
- 福岡支部＝橋園一
- 坂東支部＝金久保壽雄・逆井隆
- 英信館＝小野口忠夫・山口博
- 大野育子・増田幸弘
- 武山会＝田嶋敬・野林寛一
- 秋元秀行
- 武蔵会＝長戸都子

十月十三日＝高段者審査会
十四日＝全国大会

日本抜刀道連盟 データ (平成23年名簿による)

会員数	433名	80歳代	9名
男性	398名	70歳代	29名
女性	35名	60歳代	29名
最高齢者	87歳	50歳代	75名
最年少者	8歳	40歳代	63名
		30歳代	55名
		20歳代	27名
		19歳以下	11名

※年代別人数の合計と会員数の合計が一致しないのは年齢、生年月日の登録の無い会員がいるため